

2025年8月17日 説教「隣人を愛するとは」

ルカの福音書 10章 25～37節

前段でイエスは、真理は賢い者や知恵ある者には隠し、幼子のような心にこそ、与えられていくのだと語られました。そして、キリストを知ることがは預言者すら味わえなかった特権でもあると教えられました。

1. 律法の専門家の質問 (25～29節)

①永遠のいのちを得るには (25)「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。『先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。』」

裕福な役人も「どうしたら永遠のいのちを得られるか」という質問をしました(18:18)が、この律法の専門家の場合はイエスを試しているのです。そこには魂胆がありました。

②イエスの質問に対する返答 (26～27)「イエスは言われた。『律法には何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。』すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。』」

ここで律法の専門家が出している答えは、別の時にパリサイ人らが質問した時にイエスの出した答えでありました(マタイ 22:34～40)。これらは律法全体と預言書の全体を貫くものであります。

③自分の正しさを示そうとして (28～29)「イエスは言われた。『そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます』。しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。『では、私の隣人とは、だれのことですか。』」

そこでイエスは、「その通りです」と告げつつ、「それを実行するならば、あなたの望むいのちを得ることができます」と述べられたのです。しかし、律法の専門家は、それに飽きたらぬと同時に、自分の正しさを示そうとして、さらに質問したのです。「それでは、私の隣人とは誰ですか」と。

2. 良きサマリヤ人の話 (30～34節)

①ある人が強盗に (30)「イエスは答えて言われた。『ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げていった。』」

ここからはイエスのたとえ話です。設定はエルサレムからエリコに至る道です。ある人が強盗に襲われたというのです。強盗は複数です。被害者の着物を奪い取りとありますが、金目のものは皆奪ったことでしょう。奪うためには殴る蹴るの暴力を加えて逃げました。被害者は大けがでした。

②祭司とレビ人は (31～32)『たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。同じようにレビ人も、その場所に来て見ると、反対側を通り過ぎて行った』

そこに、まず通りかかったのが祭司です。彼は礼拝を司ることをまかされ

た祭司です。宗教家ですから、困った人がいれば率先して助けるはずであると思われるところです。ところが、祭司は大けがをした人を見ると、見て見ぬふりをして、道の反対側を通り過ぎていったのです。また、もう一人の人が通りました。彼はレビ人でした。イスラエルの12部族のうちのレビ族もいイスラエルの民のなかにあつて、礼拝を担当する部族でありました。祭司に対してと同じような期待がかかるのですが、彼も道の反対側を通って、去っていきました。

- ③サマリヤ人行動(33~34)『ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。』。

そこにもう一人が現れます。ユダヤ人とは付き合いをしない異邦人であるサマリヤ人です。律法をよく知っているわけではありません。ところが、彼は怪我をしている人を見ると、かわいそうに思って、優しく傷の手当をした上で、自分の家畜であるロバか何かに乗せて宿屋まで行き、いろいろと解放をしてあげたのです。

3. たとえ話の結論(35~37節)

- ①宿屋の主人に渡し(35)『次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』』

イエスのたとえ話は続きます。翌日、宿を出る時にその主人に二デナリを渡し、介抱を頼み、足りなければ帰りにそれを払うと告げたのです。なんとこの配慮の深さでありましょう。

- ②この三人の中で(36)『この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。』』

イエスは尋ねました。「この三人の中で、誰が強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」祭司、レビ人、サマリヤ人の三人の中から、誰かを言ってみなさいという質問です。

- ③あなたも行って(37)『彼は言った。『その人にあわれみをかけてやった人です。』するとイエスは言われた。『あなたも行って、同じようにしなさい。』』

すると、律法の専門家は答えたのです。『それは言うまでもありません。その被害者に憐みをかけてやったサマリヤ人でしょう。』彼も自分と似たような立場の者の肩を持つことはできませんでした。それはそうでしょう。道の反対側を通って過ぎていった人について、被害者の隣人となつたとは言えないでしょうから。

イエスは、あなたも行って、同じようにしなさいと、律法の専門家に促されたのでした。

《結論》今朝の聖書箇所は誤解をしやすいです。特に、この聖書箇所について、たとえ話だけを読んでしまうと誤解しやすいです。

ここは律法の専門家がイエスを試そうとして、「永遠のいのちを受けとるには何をしたら良いですか」と質問したことに始まります。それは「救われるためにはどうしたら良いですか」と言い換えることができる質問です。私たちは、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」(エペソ 2:8)と教えられています。私たちは恵みにより信仰によってのみ救われるのであって、行いによるのではない(同 9節)というのが重要な理解です。ところが、この律法学者は「何を行ったらよいのか」と質問しています。

ここから彼は間違い始めています。しかし、彼はまずはすばらしい答えをしています。つまり第一に神を愛すること、第二には隣人を愛することという、律法からの正しい選択をしたのです。イエスも「そうです、その通りにすれば命を得ます」と言われています。ところが、彼は次の段階で間違つたステップへと話しを進めます。つまり、「主なる神を愛する」という課題をわきにおいて、自分の正しさを示すために、いのちを得る道を、「隣人を愛すること」に限定していくのです。すなわち、「私の隣人とは誰ですか。」と質問しました。イエスは彼の質問に対して、たとえ話をなさいました。強盗被害に遭つた人に対する、祭司、レビ人、サマリヤ人の対応です。イエスは「私の隣人とは誰か」という質問に対しては、明確に、困つた人に対して真心を尽くしたパリサイ人の存在を示しておられます。そして、その通りにしなさいと律法の専門家に促しています。理屈でなく、行動しなさいと促しているのです。

しかし、実を言うと、これでこの専門家が最初に質問した「何をしたら永遠の命を得ることができますか」については、「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主を愛せよ」についてという御言葉を飛ばしてきたので、主は別の方向から、真理を示そうとされているのです。

つまり、このたとえ話は律法学的に読めば、良い行いをする、律法を行うことによって救われていくのだと進みがちです。私たちもへたをするとなつておきます。しかし、ここでははっきりと語っておかなければならないのは、ここに出てくる良いサマリヤ人とは、良い行いをする人ではなく、イエス・キリスト御自身だということです。困難の中にある者、救いを求める人に対して、どこまでも手を差し伸べることができる方は、救い主イエスなのです。私たちが良きサマリヤ人気取りになつたとしたら、それはこの聖書箇所の大きい取り違えです。

隣人を愛することとは、まず主を愛することから始まります。その上で、家族、主にある家族(兄姉)を愛することです。また人々に福音を伝道することです。そして、私たちの生きる現場で困っている人、助けを必要としている人のために祈り、私たちにできる最善のことは行っていくことです。良きサマリヤ人にならう道は、心を尽くしてキリストにならう道なのだと思ひましよう。キリストにある隣人愛の道をいただいでいまいましよう。